



きやまさおり
木山沙織

身長185cm

女子バレー部の
キャプテンであり

僕の
好きな人！

でも僕は
いつも木山さんを
体育館のネット越しに
見ているだけ

運動神経も

クールだけど

可愛い
その表情も

身長も

ハイルッ♡

僕には到底
手の届かない存在

そんな彼女を
傍で見たい
だけで僕は

幸せだった

木山さんが
行方不明に
なったのは
3カ月前

学校中が騒ぎになったが
その行方を知っている人は
いなかった

必死に探して
ようやくたどり着いたのは
港に停泊している船だった
彼女のことを心配するあまり
一人で船に乗り込んだが
そこで僕は
中にいた外国人の男達に
捕らえられてしまった

「今日はまた
別の“メスマ”が
来るらしいですよ(笑)」

「なんでも今日ののは
“日本産”だとか(笑)
楽しみですわね」

「で？“あれ”はなんですか？」

「特別ゲストらしいですよ(笑)
今日のメスマを助けに
来たみたいですが(笑)」

会場内で飛び交う英語
僕にはその内容を
理解できなかったが

ここに集まっている人間が
皆悪趣味なことを
話していることだけは
何となく分かった

「お集りの紳士の皆様
大変お待たせ
いたしました」

「早速本日の主役を
お呼び致しますよ」



「さあっ!!!注目下さい」
「本日も登場のメス馬」

僕は目を疑った
目の前に
現れたのは

下品な
「スチュームを纏い
背中に乗った男に
ムチで打たれながら
入場してくる

「サオリちゃん
です♡」

木山さんの姿
だった

「おお♡これはまた
良いメス馬を
仕入れましたね♡」

「男を乗せて
歩けるのは(笑)
乗り物としては
上出来ですね♡」

バレ―部で鍛えられた
その肉体は
男を乗せて歩き回る
乗り物として
利用され

隠さなければ
ならない場所も
容赦なく
放り出されていた
一体この3カ月で
何があったら
こんなことに

「ほらっサオリ♡
皆様に♡挨拶だぞ」





「メス馬サオリちゃんの
公開搾精ショーです♡」

「おおお(笑)
日本人のガキ程度なら
軽々ですね(笑)」
「いいぞ、そのまま
射精させろ(笑)」

軽々僕を持ち上げて
木山さんは
自分から腰を振って
射精を促す

人生で初めて
しかも憧れの木山さんと
繋がったのに、
その体験は
ここにいる男達にとっては
見世物の一つにしか
過ぎなかった

木山さんの
がつしりとした
それでいて女の子らしい
柔らかい体で
一方的な体勢で
ペニスを刺激されて…



ズン

ズン

「ほほ(笑)
すごい体位ですね(笑)」

「ほほ」

「体格も良いし
体力もありますね♡
これは良い繁殖牝馬に
なりそうだ(笑)」

初めての僕には
こんなの

耐えられる訳が
無かった！

ドロォォ♡

「ほお」

「ふー」

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

「ぶお」

甘えた声で何かを
促し始めた
それは

木山さんは最後まで
僕に気付くことなく
事を終わらせて
男の元へ戻ると

「皆様っ！
上手に搾精出来た
サオリちゃんに
大きな拍手をっ！」

「サオリちゃんには
不釣り合いなオス
でしたねえ(笑)」

「おやおや
もう出しましたよ
あのガキ(笑)」

「そうだな(笑)
上手に芸が出来た家畜には
褒美をやらんとな(笑)」



「さあ…まずは
記念すべき一発目ですね♡」

「ひよろひよろのガキではなく
優秀な我々の遺伝子を買って
ま●こも喜んでますねえ(笑)」

♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

「さあ皆様
お披露目は
これにて終了です」

「この後は二晩
ベッドルームにて
皆さんにじっくり
このメス馬を味わって
頂きますからね♡」

「では皆さん
ベッドルームに移動して
ください♡
順番にこの馬に
乗って頂け
ますからね♡」

さらなる凌辱が
待っている部屋に
自ら男たちを引き連れて
歩かされる木山さん
僕が最後に見たのは
そんな彼女の後姿だった

彼女の体はそんなことを
するためのモノではない
こんな男たちに
目を付けられなければ
バレ一部で活躍する
普通の女の子だった
はずなのに

ムチを入れられると
木山さんは会場の外へと
歩き出した

















